

災害時の帰宅困難者の支援

安全に我が家へGO！

災害時徒歩帰宅支援マップ作成



裾野市の特徴 市民意識調査から

- ・96%の人が災害への備えの重要性を理解しているが、55%の人が災害に対する備えをしていない
- ・昼間人口 55,947 人 > 夜間人口 52,737

備えの必要性に対し
備えが少ない！

大企業従業員、観光客等により発生する帰宅困難者を
地区によっては避難所に収容できない可能性がある。

あるべき姿

「関係市民=(裾野市内から市外に通勤通学する人)+(裾野市外から市内に通勤通学する人)
=約3万人に対し、安心・安全に徒歩帰宅するための情報を提供している」

問題

安心・安全に徒歩帰宅するための情報を提供できていない



ギャップ＝問題

現状

裾野市は防災マップを公開しているが、安心・安全に徒歩帰宅するための情報を提供していない

問題の明確化

- ① 徒歩帰宅に必要な情報が不足（徒歩帰宅経路、徒歩帰宅支援ステーション）
- ② 行政境界を越えると情報がない

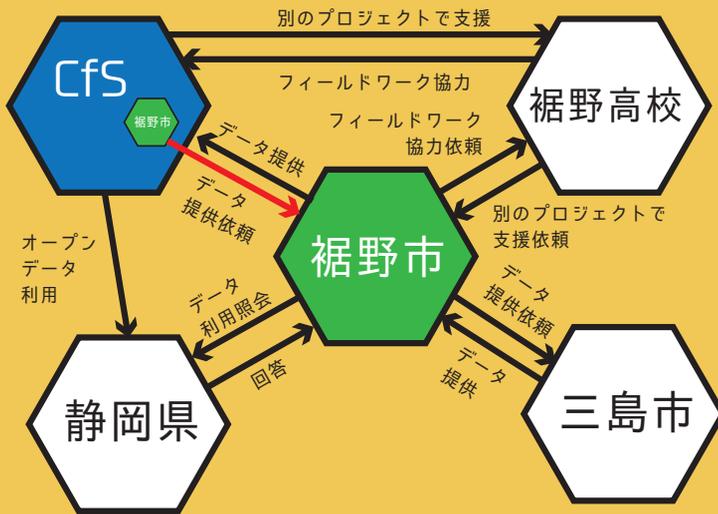
解決策の検討

必要な情報の明確化

NO.	安心・安全な徒歩帰宅に必要な情報	データ有無	使用可能なデータか？	後工程で活用可能な形式か？
1	行 歩行可能な道（緊急輸送路）がわかる	○	×	×
2	自 フラットな（歩き易い）道がわかる	×	×	×
3	行 危険な場所がわかる	○	×	×
4	自 休憩できる場所がわかる	×	×	×
5	自 トイレの場所がわかる	×	×	×
6	自 自動販売機の場所がわかる	×	×	×
7	自 コンビニ（徒歩帰宅支援ステーション）の場所がわかる	×	×	×
8	行 街路灯のある（夜歩いても明るい）道がわかる	○	×	×
9	行 行政境界に関係なく周辺市町村の情報もわかる	×	×	×

行 行政から収集するデータ **自** 自分たちで収集するデータ

情報収集体制



①行政から収集するデータは、Cfs内の裾野市職員が行政への橋渡し役となり、関係各所へデータ収集を働きかける

②自分たちで収集するデータは、フィールドワーク（街歩き）によりデータ収集する

解決策の実行

NO.	安心・安全な徒歩帰宅に必要な情報	データ有無	使用可能なデータか？	後工程で活用可能な形式か？
1	歩行可能な道（緊急輸送路）がわかる	○	×→○	×→○
3	危険な場所がわかる	○	×→○	×→○
8	街路灯のある（夜歩いても明るい）道がわかる	○	×→○	×→○
9	行政境界に関係なく周辺市町村の情報もわかる	×→○	×→○	×→△

課題

- ・使用可能なデータでも後工程で活用可能な形式でないデータあり
- ・オープンデータ公開するには、著作権・著作者人格権について不明確なデータあり
- ・既に公開されているオープンデータに不足している項目あり

自分たちで集めるデータの収集状況

NO.	安心・安全な徒歩帰宅に必要な情報	データ有無	使用可能なデータか？	後工程で活用可能な形式か？
2	フラットな（歩き易い）道がわかる	×→△	×→○	×→○
5	トイレの場所がわかる	×→△	×→○	×→○
6	自動販売機の場所がわかる	×→△	×→○	×→○
7	コンビニ（徒歩帰宅支援ステーション）の場所がわかる	×→△	×→○	×→○

課題

- ・データ収集に時間がかかり、特定路線のデータしか集められなかった
- ①歩いてデータを収集している ②集めたデータの加工が必要
- ・実際にフィールドワークをすると、障害者目線で不足している情報あり
(例) 幅1 m未満の歩道、段差のある歩道は車椅子での通行は困難



まとめ

🔪 行政からのデータ収集が予想以上に進んだ。

- ①Cfs内の市職員の活躍、
- ②裾野市とCode for JAPANとのパートナーシップ協定「データ利活用推進シティ宣言」が追い風



今後

- ①データ収集の継続
 - ・行政からのデータ収集を周辺市町村へ
 - ・フィールドワークは線から面へ
- ②データ公開の検討
 - ・独自アプリ化以外にも既存アプリへのデータ公開も探る